

# 最上義光物語の解説と翻刻 その二

— 国立国会図書館蔵滝沢馬琴手沢本 —

松原 一義

(キーワード：最上義光物語・滝沢馬琴手沢本・鳴門教育大学甲本・同乙本)

## 一 解 説

本稿は、「最上義光物語の解説と翻刻―国立国会図書館蔵滝沢馬琴手沢本―」(『鳴門教育大学研究紀要』人文・社会科学編、第9巻、一九九四年)の続編であり、本稿では、その物語の「巻之二」の部分を翻刻した。  
本書の巻之一と巻之二の目録に限定して、本学所蔵の二本と比較すると、次のようになる。本学所蔵本はいずれも合冊本(二冊本)であり、特に、後者は抄出本となっている。

本写本(国立国会本)	合冊本(鳴門教育大甲本)	合冊抄出本(鳴門教育大乙本)
最上義光物語巻之一	義光物語上巻目録	義光物語惣目録
目録		
一 義守逝去事	一 義守逝去之事	一 義守公逝去之事 上之巻
一 城取十郎長久討捕事	一 白鳥十郎殿後之事	一 白鳥十郎討取後之事
一 寒河江城退治事	一 寒河江退治之事	一 寒河被退治之事
一 八沼城降参事	一 八沼降参之事	一 八ツ沼降参之事
一 天童城開退事	一 天童開退之事	一 天童開退之事
一 柏木山合戦事	一 柏木山合戦事	
最上義光物語巻之二		
目録		
一 満兼生害事	一 満兼公生害之事	一 延沢能登守勇力之事
一 延沢能登勇力事	一 延沢能登守勇力之事	一 延沢能登守勇力之事
一 兼山城開退事	義光物語中巻目録	一 兼山開退之事并ノ
一 悪屋形滅亡事	一 兼山開退之事	一 悪屋形滅亡之事ノ
	一 庄内悪屋形光安滅亡の事	是より中ノ巻

また、本写本は他の諸本に対して、どのような本文をもっているのか。その一部を示し、次の諸本と対比することにより示してみた。

- 1 最上記(『山形市史』史料編1翻刻、山形市市史編集委員会、昭和四八年三月)
- 2 最上義光物語(群書類従に翻刻)
- 3 義光物語(鳴門教育大学蔵甲本)
- 4 義光物語(鳴門教育大学蔵乙本)

まず、1の『最上記』は、次のようなものである。

最上義光物語(国立国会図書館蔵本)

最上記

国家の為に宜者と云ほとなるは皆推て倅仁の身となし悪行日々に増國中諸民一人として安堵の思ひをなさす

国家のためには宜ものと云程成ば、皆推して停任の身となし、詔ひおもねるもの斗威名盛にて近習にときめけば、悪行日々に弥増、國中の諸民老人として安堵の思ひをなさす、

然間我万民の為に義光へ御味方申庄内御退治案内可致と存也我御味方申ならば残る家子大方御手に可属されは貴殿爰許に居られたる社幸なれ急此旨被致注進義光於御承引は近日山形へ可落行也さあらは貴殿の御勘気も御赦免有事無疑と心底不残打解て申ける

然間我万民のため、義光公へ御味方申、庄内御退治の御案内可致と存立也、我のみかた申ならば、残る家の子大方御手に属すべし、去ば貴殿爰許に居られたるこそ幸なれ、急此旨注進いたされ、義光公御承引におひては、近日山形へ落行べき也、さもあらば御勘気も御赦免あらん事疑なしと、心底を不残打解申けり、

元来備前加様の謀のため数年居住して諸人の心を引見ると言共大事の趣なれば如

本より備前か様の斗策のため数年庄内に居住して、諸人の心を引見るといへども、

何有んと肺肝を碎きける処に中務如此申ければ大に悦尤無余義思召立也

乍去遙々と山形迄落行は謀不足に似たり

大事の儀なりければ、いかにあらむと肺肝を碎きける処に、中務如此申ければ大に悦、尤余儀なき思召立也、悪逆の主を亡し、万民の愁を助給はん事、諸神もいかにかくしと思召無也、去ながらはるくと山形まで落行れんは、謀の不足所也、

本書に比べて、『最上記』は饒舌である。「義光」についても敬語を付す。だからと言って、本書の内容がまとまっていないう訳でもない。いわば、本書が略本だとすれば、『最上記』が広本とでもいうところであろうか。本書が他本以上に漢文体の名残を示している点も注目される。

次に、2の群書類従本『最上義光物語』は、もつとも本書に近い本文をもつ。次のようなものである。

國家の為によろしき者と云程成は。皆推して停住の身となし。諂ある者計。美名盛にて。近習に時めけは。悪行日々に増し。國家の諸民。一人として安堵の思をなさす。然に我為万民。義光公へ御味方申。庄内御退治の御案内可致と存立也。我御味方申ならば。残る家の子大かた御手に可属。去は貴殿。爰元に被居たるこそ幸なれ。急此事。注進いたされ。義光公於御承引は。近日山形へ可落行也。

さもあらは御勘気も御赦免あらん事無疑と。心底不残打とけて申ける。本より備前加様之謀のため。数年庄内に住居して。諸人の心を引見るといへとも。大事の事なれば。いかゝあらんと。肺肝を僻ける所に。中務如斯申ければ。大に悦尤無余儀思召立也。

悪逆の主を亡し。万民の患を助け玉はん事。諸神も争か悪しと思し召んや。乍去遙々と山形迄落行れんは。計策不足の所なり。

しかしながら、このテキストも本書よりは詳細で、「義光」について敬語を付す。第3の『義光物語』（大学甲本）は、次のようなものである。

國家の為宣しからず異名盛にして近習、時めき悪行日々重て国中の諸民老人として案堵の思ひをなさす

然に我此度万民の為義光公御一味申者ならば残る家の子大形御手に属すべし貴殿幸ひ当境に居合給ふこそ吉事なれば最早此上は時を移さず山形注進之手立肝要成べしと語ければ備前深満足し本より加様の為を心底挫、故数年

此方住居して諸人の心を引見るといへとも流石大事の義し有ければいかゝあらんとはひかかんを疑ひける処に折節中務に出合けるはひとへに天の恵み爰に頭れ思ひ尽に成行事大慶是に不可過

更は我れ山形忍び行件の趣言上申べし御身は跡にて智略肝要に頼み入と云ければ中務云けるは尤左様の候所候得共

乍去はるくと山形迄落行き給わんも謀不足の所也

第4の『義光物語』（大学乙本）は、次のようなものである。

國家の為不宣いめうさかんにして近習はめければ悪行日々重りて国中之諸民一人として安堵之思へをなさす

然に我此度万民の為義光公御味方申者ならば残る家の子大形は御手属すべし貴殿幸ひ当地居玉ふ社吉事なり最早此上は時を不移山形へ注進之手立テ社肝要成べしと語りければ

備前満足して本よりか様之為を心底挫し故数年此方住居仕諸人の心を引見るといふ共さすが大事の義訓はいかゝあらんと肺肝をくだきし所折節中務殿出合けるは偏天之恵成り思ひのま成行事大慶是過へからずさらは

我山形ひしのび行件の趣言上申へし御身は斯て智略肝要頼入と言ければ中務申けるは尤さや々々候得共

乍去りはるくと山形へ落行き玉はんも謀不足の所也

大学乙本は、項目を欠くところもある抄出本であるが、そのせいであろうか、国会図書館本がもつ「さあらは貴殿の御勘気も御赦免有事無疑と心底不残打解て申ける」という部分を欠く。しかしながら、それにもかかわらず、大学乙本は、国会図書館本より饒舌なのである。

以上の比較によれば、①本写本がその本文量において、少なく簡潔であること、すなわち本書を略本、他の四本を広本であると称することができるのではないかということ、また、②主人公の「義光」についても、本写本では「義光」の名に敬語が付されていないのに対し、他の四本では「義光公」と敬語が付されているという点が指摘できる。ただし、この意味については、さらにこれらの諸本の全体を比較した後に論述することにし、今はその事実を指摘するにとどめたい。

二 翻 刻

凡例

- 一 翻字にあたっては、できるだけ原本のかたちを尊重したが、常用漢字はほぼ新字体に改めた。
- 一 改行は原本通りとし、各面の終わりに、丁数及び表裏の別を、例えば、(一才)、(二ウ)のような形で示した。
- 一 (一才) || 一丁表のこと (二ウ) || 二丁裏のこと
- 一 割り注は、小字で示し、その改行箇所は、特に示さなかった。
- 一 判読不可能な本文は、で示し、仮読を記入した場合もある。
- 一 明らかに誤写と判断できるものは、(マ)と傍記した。

翻刻

最上義光物語卷之二 (磯見の落款あり)

表紙

最上義光物語卷之二

目録

- 一 満兼生害事
- 一 延沢能登勇力事
- 一 兼山城開退事
- 一 悪屋形滅亡事

最上義光物語卷之二

満兼生害事

去程に屋形の御前には氏家尾張伊良子宗牛を被召此度の合戦無事に成照宗退散被致事天の与る処也いさや此刻上野山へ押寄満兼を可討取上の山勢は先日柏木山合戦に後れを取といひ又照宗退散に力を落し臆病神の付て防に便有ましと被仰ければ氏家尾張進み出て御詫尤<sup>二</sup>は候へとも満兼の家子に里見

一 二 三 四 五 六 七 八 九

一ウ

内蔵へ同民部とて無隠剛の者有之其外士卒も数度の誉取たる者多し早速に責落さん事難成数日を送らば又照宗加勢必定也然は由々敷大事也所詮謀を以御退治可然と其知略と言は私如腹心召仕候者の弟出家に成上の山寺を持居申候故日来里見兄弟へも出入仕候就夫内々兩人か心底をも承候に内蔵は専道を嗜む者候弟の民部は武勇の達人なれ共常々其身を亭々と思ひ候たる者のよし彼出家物語

二才

一 二 三 四 五 六 七 八 九

致候間民部方へ所領過分に可被下と御書を被遣は則御味方に可參民部さへ御味方成候へは満兼を打捕申儀尤易かるへしと申ければ屋形聞召尤可然兎角彼出家を以里見兄弟か心底を引見其上にて御書可被遣と宣へは宗牛も尾張か策誠に賢し此方便にては満兼退治御手間被取ましきと申上る去問尾張は彼僧を呼寄宗牛と兩人にて委細申含遣しける此出家内蔵に申様如御存私兄氏家方罷在

二ウ

一 二 三 四 五 六 七 八 九

候か以使申越候は屋形近日其地江御発行候在々迎も穩には有間敷致其心得候へと申越今迄は仙台の照宗を高き山深き海共御頼候処に先日柏木山合戦以後義光も御無事被成候得は誰有て後詰仕者なし落城程あるましきか里見の御家共断絶せん事敷ても余り有敵寄不來内何とそ御分別候へかしとそ申ける内蔵つくくくと聞尤其方被申こと今義光照宗御和睦の事なれば敢て味方の助可仕者なし

三才

一 二 三 四 五 六 七 八 九



若者とも走り出引組刺殺しぬ扱此事延引  
いたし満兼へ洩聞へ落行給ふ事も可有間則  
今宵忍ひ入討可申とて日来民部方<sup>え</sup>他事  
なく致出入ける侍に佐竹平内と言ものあり

六ウ

六  
七  
八  
九

彼者を潜に頼ければ無異儀同心いたしけり則  
二心有ましき旨誓紙を為<sup>レ</sup>書今夜忍入討捕可  
申間御坪のかけかねをはつし置候へと堅云台  
歸しけりさて夜半計に矢桐相模民部兩人難  
なく忍入夜明頃に満兼を討取ければ満兼の  
生害を伝聞近習外様の侍上を下へと騒<sup>さわ</sup>  
動しける処に民部使を以満兼逆意を被<sup>くは</sup>企  
に依て義光の蒙<sup>ごもり</sup> 仰討まいらせたり内蔵も  
満兼一味たる間昨日討取処也幸為御使矢桐

七オ

九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

相模我等屋敷に被居候条何義早々可被致  
降参若異儀の輩<sup>とも</sup>於有之は速に可誅罰  
のよし申遣ければ此義如何と詮義区々也と云  
へとも満兼は生害也杖柱とも頼し内蔵は被  
討たり民部は如此なれば誰を為大将籠城  
すへきやとて我もくと降参しける間矢桐  
歸り右の様子委く申上ければ屋形御悦喜  
有て尾張を召其方此度の策いつに勝れ  
たりとて御加増を給ける追付民部も山形

七ウ

九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

え参御礼申上ければ如御約束満兼跡式<sup>あとしき</sup>  
壱万八千石被下置上の山え罷帰内蔵か子共  
尋出し可誅由被仰付ける内蔵か内室は女房  
壱人召くしとある在所に深く忍ひて忘形見  
と共におはしましける所に民部山形より帰内蔵か  
子とも於隠置て可為曲事致訴人者有之て  
褒美は可為望と國中へ触ける故所にも住

七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

居難成て安養寺と言寺へ歎入頼ければ  
住持心やさしくかひく敷うけ取懐に入山越

八オ

八  
九

に仙台へ行て一類の有けるに養せ奉つ年  
月を経て此子成人し父の仇を報んと山形  
え忍ひ民部を認め共用心きひしければ  
不叶してせめて無念を散ん為とて民部へ  
同心せし一類を余多討取ぬ其手柄中く筆  
にも難及働也其後正宗卿へ被呼出大坂御陣  
にも二三度致高名宜召仕給処に百姓公事  
を御捌悪敷とて仙台を立退紀州へ参り  
里見勘四郎と名乗御旗本を預り居ける

八ウ

九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

今程は七十五六歳にて有へき也

延沢能登勇力之事

延沢能登は力量人に勝たる由屋形聞召及れ  
力の程御覽有へしとて近習外様の内にて強  
力の者とも七八人勝り出し御供にて屋形を初  
何も明衣を着し俄に能登か屋鋪へ御越有  
ける能登も聞伝支度いたし其身老人広間  
の庭に罷出今やくと待居たる頃は七月十  
五夜なれば月も限なくして互の力も掲焉

九オ

九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

折節七八人の者能登か居たる大庭へ走り  
出二人取付たるに肘をかひつかみ七八間斗  
投る斯ては叶ましと残四五人のものとも前後  
左右より一度に組付倒さんとしけるを大力の  
覚取たる能登なれば物の数ともせず蹴倒し  
屋形へ飛て懸る屋形此躰を見給ひて中々  
御力に難叶ければ躰をも不見して逃給ふ  
処を能登追詰御後より懐きければ無詮方  
や思召けん傍に二匣計の桜木有けるに

九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一



入んと詮議区々なりけるに凶書と云家の子  
進み出此城にて義理を立無事は難成屋形

典義未御若年なれば未頼母敷候幸に鮭川

一方は敵開置たれば一先庄内へ御退可然と

評定一途に究其夜諸勢悉く舟に乗庄内

悪屋形安光を頼み落行けり夜行の者共此気

一三才

色を見て急き御旗本へ参り城中の勢落

行と覚鮭川の方に人声仕続松数多見へ候

と申上ければ義光聞召さも有へし思ふ子細

ある間落は落せよとて其夜は静にて御座

有ける翌日未明に押寄見給ふに病たる馬四

五正有て人更になし諸軍勢是を見てか程

兵糧に詰たらは無力して攻落さん事可安に

不知して討漏しぬる口惜さよと口々に申ければ

屋形義光聞召我は知と云共典膳は文武に達

一三ウ

たる若者と云其上系図も佐々木の家なれば

旁助置味方になさん為不知顔にて落しぬる

なり悪屋形安光を頼み庄内へ落行へしと

宣ける如家光安滅亡の後氏家尾張を頼

降参し山形に相詰被致御奉公武勇のみ

に非す才覚まで勝たり本領を給鮭延越

前と号し後は御家の仕置を被仰付候也

悪屋形安光滅亡事

去程に屋形安光は去年兼山より草伏備前

一四才

を御寝所へ被召終夜被仰合事有然る 其

翌年の春堅く殺生禁断の山にて備前鹿狩

追鳥狩様々の悪行をなせり屋形安光聞召大

に御機嫌損て宣ひけるは此山には義守の御

墓所有により日来堅く殺生禁断申付たる

にか様の悪行をなす事前代未聞の曲者也

然共武田兵庫備前去年兼山にて討死す其

忠義に依て命の段は免し置とて国中を

御追放故無是非庄内へ逃行悪屋形安光を

一四ウ

頼みけるに光安も備前か右之様子を悉く聞

に山形へは二度可帰ものにあらずとて則近習

に召置給ふ元来備前賢かたき者なれば屋形

安光の氣に入二三年の内に過分の領知給はり腹心

の思ひをなしけり然に光安代々の家の子に中務

と申て六十歳余の老人有十二歳に成し男子

壺人持しを兼て光安の近習に被召仕覺

或時少の過しけるを引寄手自刺殺し給中務

老後の歎中く申もおろかなり去れば悲み

一五才

の余りに思ひけるは縦たとへ少の過有はとて今年

漸十二歳いまた東西をも不弁年也其上我等

数年致軍功今既六十に余る身に介様に憂

目を見せ給ふ事返々も無情と恨骨髄に

徹しければ病氣と号高坂といふ領地へ

引籠明暮歎居たりける家子此躰を見て

中務か恨道理也忠節諸人に勝れたる中

務にさへ如斯つらく当り給ふまして我々杯

は不頼母敷と謚けるに或者申しけるは山形の

一五ウ

義光は常々御物語に大将と士卒は扇に喩へ

たり要は主人骨ほねは物頭地紙は惣勢也一ツ闕て

も難事成其上士卒を思ふ事如一子すと宣

よし也と語ければ最可為大将人の心持かく

有んに士卒誰か命を惜んや然るに此屋形安光

武勇を被好様にて無是非恐随といへとも威

九 八 七 六 五 四 三 二 一 九 八 七 六 五 四 三 二 一 九 八 七 六 五 四 三 二 一 九 八 七 六 五 四 三 二 一

けり光安の聞を憚中務へ音信する者一人もなし  
然に備前は下心ある故に夜に入人静り忍

一六才

九 八

大方御手に可属されは貴殿爰許に居られ  
たる社幸なれ急此旨被致注進義光於

一七ウ

一

やかに音信色々物語して中務を慰め又は子  
息の事をも言共に歎ける間中務申けるは

数年親き傍輩さへ屋形安光に恐れこと問ふ者

一人もなし御身は近年の好み遠路共いはず加様

に毎夜問来憂を慰め給ふ事誠に難有とて

悦あへり然に或夜雨降物哀なる折節に竹筒杯

持せ行けり中務出合今宵は雨降一入閑敷

候に能こそ御出候とて終夜物語に諸国の大

將の噂に成中務問けるは誠やらん山形の義

一六ウ

九 八 七 六 五 四 三 二 一

只此儘にましくて蜜々にて一味輩を相語ひ  
其上にて山形へ注を申ならは義光早速押寄

一八才

一

光は御慈悲を専と被為万民に情深しと承  
さも候哉と尋ければ備前答て申様義光

近年武勇を以近国大形切随へ隣国にて

は鬼神のことく申と言共内心は究て慈悲

深く万民を一子の様に思ひ年傾き齡衰

たる者迄夫々に扶持を下給ひ憐み給ふ

と懇に語ければ其時中務近く寄囁ける

は申出に付無面目は候へ共今度の有様余り

恨敷存る也去はこゝに十二歳の時越後村上

一七才

九 八 七 六 五 四 三 二 一

しける然問連判の族中務方へ集りければ  
備前前書を出し各判形を相居備前に渡し

其上にて評定を遂相図を極此旨備前方より

山形注進申ければ屋形不斜悦ひ今迄延

引無心元思ひつるに加様に光安家の子不残味

方に成候儀備前か忠義不浅とて不移時日

大軍を率打立給ふ先陣は既に月峯を越

松根黒川迄打入ける此由光安聞給ひ近年如

鬼神申習はず義光なれば我相手に不足

なし何れも随分働候へとて城を打出義光

一九才

九 八 七 六 五 四 三 二 一

案中可致と存也我御味方申ならは残る家子

九 八 七 六 五 四 三 二 一

なし何れも随分働候へとて城を打出義光

一



## The Comment on the Tale of Yoshiaki MOGAMI and the Reprint, the Second Part

— about the book with the notes by Bakin TAKIZAWA, which belongs to the National Diet Library —

Kazuyoshi MATSUBARA

First, this paper is composed of the sequel to «the comment on the tale of Yoshiaki MOGAMI and the reprint - about the book with the notes by Bakin TAKIZAWA, which belongs to the National Diet Library -»<sup>\*1</sup>. The second part of the story is reprinted in this paper.

Next, the manuscript is examined in comparison with the four others. The analysis indicates that the text is shorter and more compact than the other's, and that the name of the hero, «Yoshiaki» is written without the prefix in the manuscript, when «the Prince of Yoshiaki» is with the prefix in the others. After comparing the whole book with the all text of the four others, it will be possible to find out the import of those differences. But, in this paper, efforts are targeted simply to the enumeration of the differences.

---

\*1. See the bulletin of Naruto Kyoiku University, by the human science and the social science, volume 9, 1994